

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：32704

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830026

研究課題名(和文) 15 - 16世紀フィレンツェ・オスマン貿易史 経営記録の分析を中心として

研究課題名(英文) A History of the Trade between Florence and the Ottoman Empire in the Fifteenth and Sixteenth Centuries. An Analysis of Management Documents.

研究代表者

鴨野 洋一郎 (KAMONO, Yoichiro)

関東学院大学・経済学部・講師

研究者番号：80631192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、15 - 16世紀にフィレンツェがオスマン帝国と行った貿易の実態を調査した。まず、毛織物を製造し自らそれをオスマン帝国で販売したグワンティ毛織物会社に着目し、この会社の経営記録から貿易でかかった経費を詳しく分析した。つぎに、フィレンツェの会社や商人の記録から、オスマン帝国からのペルシア生糸輸入の実態を調査した。これら二つの調査から、フィレンツェの会社がオスマン帝国との貿易を予測可能な経費で安全に行っていた事実を明らかにした。そして三つ目の研究として、フィレンツェの赤色染料輸入に着目し、カンビーニ商会の記録からその詳細をデータとしてまとめた。

研究成果の概要(英文)： This study investigated the actual situation of the trade between Florence and the Ottoman Empire in the fifteenth and sixteenth centuries. First it focused on the Guanti Wool Company which produced woolens and sold them by itself in the Ottoman Empire and analyzed the costs incurred during the trade on the basis of management documents of this company. Secondly it investigated the actual situation of the import of Persian silk from the Ottoman Empire on the basis of documents of the Florentine companies and merchants. Research from these two sources made clear the fact that Florentine companies traded with the Ottoman Empire safely with predictable costs. Lastly this study focused on the import of red dye into Florence and collected data on its details from the records of the Cambini Company.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：経済史 西洋史 フィレンツェ オスマン帝国 国際情報交換(イタリア)

1. 研究開始当初の背景

中世イタリアの都市国家フィレンツェは13世紀から16世紀にかけて活発な経済活動を展開し、ルネサンスを開花させた。この経済活動についてはA. サポーリやF. メリスをはじめこれまで多くの研究者が経営記録に基づき実証的に研究してきた。しかしこれまでの研究は、「貿易する織元」の成長およびその結果としての織物業と国際商業との結合というフィレンツェで生じた二つの変化について大きな関心を払ってこなかった。

メリスによれば、14世紀にヨーロッパ内交通が発達したことで遠隔地間の輸送費が低下した。こうしてフィレンツェの中小規模の織元も国際商業に参入できるようになった。とりわけ15世紀半ばからはじまるオスマン帝国との貿易は、こうした織元の成長を促したと考えられる。

報告者はこれまでフィレンツェ・オスマン貿易についてフィレンツェ内外の古文書館に所蔵される史料に基づき研究してきた。そこで本研究では、この研究をさらに推し進め、「貿易する織元」の活動実態をより詳細に解明することを第一の目的とした。

2. 研究の目的

本研究を開始するまでに報告者は、グワンティ毛織物会社およびセッリストリー金箔会社という二つの会社に着目し、両者の経営の全体像や、オスマン帝国で販売した製品の種類や価格を分析してきた。つまりもっぱら会社で作る製品に着目した研究を行ってきた。

しかし上述したような「貿易する織元」の成長および織物業と国際商業との結合というフィレンツェ経済における大きな変化を考察するには、製品の検討のみでは不十分である。そこで本研究では、1. 「貿易する織元」、2. 織元以外でオスマン貿易を行った中小規模の会社や商人、3. 彼らを通じてオスマン貿易と関わった大規模な商会についての詳細な検討を行い、そこから15-16世紀のフィレンツェ経済の構造を研究史が明らかにした14世紀のそれと比較することを研究の目的とした。

3. 研究の方法

本研究がおもに依拠する史料は、フィレンツェの古文書館が所蔵する会社・商人の経営記録(総勘定元帳、駐在員帳簿、備忘録、商業書簡)である。すでに留学中に調査しCD-ROMに収めた膨大な史料を丹念に読み込み、そこからデータを抽出し分析することが本研究の主要な作業となった。さらに最新の研究や重要な古典的研究も幅広く収集し、調査で得たデータをより広い歴史的コンテクストの中に位置付けるべく努力した。

(1)まずグワンティ毛織物会社の経営について調査するため、フィレンツェ国立古文書館

が所蔵する以下の未刊行史料を読み込んだ。

Archivio di Stato di Firenze, *Corporazioni religiose soppresse dal governo francese*, 79, 208-213.

この会社についてはすでに星野が考察しているが、報告者は貿易でかかった経費の詳細を検討することで「貿易する織元」としてのグワンティ会社の活動をより明確にしようと試みた。

(2)つぎにグワンティ毛織物会社やオスマン帝国内に駐在したフィレンツェ商人ジョヴァンニ・マリギが行ったペルシア生糸の取引について調査するため、上述の史料の他に以下の史料を読み込んだ。

Harvard University, Baker Library, *Selfridge Collection*, MS. Medici, 547.

この史料はマリギがフィレンツェの会社へ書き送った商業書簡の複写帳であり、会計帳簿からは判明しない取引に関わる様々な出来事を伝えている。本研究ではこの史料のマイクロフィルムを、刊行されている一部の英訳も参考にしつつ読み込んだ。

(3)そして最後に、オスマン貿易も行った大規模な商会の例としてカンピーニ商会に着目し、フィレンツェのインノチェンティ捨児養育院古文書館に所蔵される以下の史料を調査した。

Archivio dell'Ospedale degli Innocenti di Firenze, 12636-12641, 12679-12692.

これらは今日まで例外的に伝来している一連の備忘録である。備忘録にはカンピーニ商会が輸入ないし輸出した商品や輸送にかかった経費などに関する詳細が記入されている。そこで本研究では、この商会とオスマン帝国との経済的関係について調べるとともに、商会が赤色染料として熱心に輸入した昆虫グラナー・ケルメスに着目した。商会はこれらをおもにイベリア半島およびバルカン半島から輸入した。そのためまずバルカン半島からの昆虫輸入の実態を調査し、この輸入におけるオスマン貿易の役割を考察した。ただその後、商会が多くの昆虫を輸入したイベリア半島のリスボンの重要性が浮き彫りとなり、フィレンツェとリスボンとの経済的関係についても調査を進めることとなった。

4. 研究成果

以上の研究方法から得た研究成果については、以下の三つにまとめられる。

(1)まずグワンティ毛織物会社の調査では、とりわけ上述の史料のうち208から多くの情報を得ることができた。これはバルトロメオ・グワンティが会社の駐在員としてオスマン帝国のブルサで滞在したときに記録した会計帳簿である。ここにはバルトロメオが毛織物の販売やペルシア生糸の購入に際して支払った経費などが詳細に記録された。そ

ここでこの会計帳簿を詳細に読み込み、他の史料も利用することで以下の結論を得た。1. 売上高に対する販売費の比率が約 25%あった、2. 売上高に対する輸送費の比率は異なる経路を使っても約 15%にとどまった、3. 売上高に対するブルサでかかった経費の比率は約 10%であった、4. ペルシア生系の輸入費は必要かつ予測可能な経費で構成された、5. 海難事故や盗難といったリスクを最小限に抑える方法が存在していた。そしてこれらの結論から、フィレンツェの中規模毛織物会社がオスマン貿易に参入するための条件が経費の面で整っていたことを明らかにした。さらにそこから、こうした会社が貿易専門の会社へと移る可能性も示唆した。この研究成果の詳細を『史学雑誌』第 122 編第 2 号で公表した。

(2)つぎにペルシア生系輸入の調査では、グワンティ毛織物会社の会計帳簿およびジョヴァンニ・マリノの商業書簡から輸入に関する具体的な情報を得た。その情報に基づき、ペルシア生系の購入方法、ユダヤ人からの購入資金調達、現地での情報収集、輸入費の構成、盗難事件の解決方法、といった諸点について検討した。その結果、オスマン帝国に駐在するフィレンツェ商人が定率ないし定額の諸経費を支払いつつ生糸をフィレンツェまで輸送し、その途中で盗難などの事件に遭遇してもオスマン権力の介入により円滑な解決を期待できたことを解明した。これは、フィレンツェ商人がオスマン条約体制の下である程度安定した国際商業活動を展開していた証拠となる。さらにペルシア生系のフィレンツェにおける販売実態も検討することで、フィレンツェの毛織物会社がペルシア生糸を通じて絹織物製造会社と密接に結びついていた事実も浮き彫りにした。また、毛織物会社がペルシア生糸と引き換えに絹織物製造会社から絹織物を獲得し、それを再びオスマン帝国で販売していた可能性が高いことも示唆した。この研究成果の詳細を『西洋史学』247 号で公表した。

(3)そして最後にカンピーニ商会の調査では、ほぼ完全に伝来する一連の備忘録を詳細に読み込み、商会が赤色染料として輸入した昆虫の種類、発送地、産地、重量、そしてフィレンツェにおける販売価格に関する情報を取り出してデータにした。このデータから判明したのは以下の諸点である。1. 商会は、「グラナ grana」と史料で記録される昆虫染料をおもにバルカン半島およびイベリア半島の各都市から大量に輸入した。2. 商会は、「ケルメス chermisi」と記録される昆虫染料をおもにバルカン半島から輸入した。このケルメスについては、1465 年以降輸入量が減少する。3. カンピーニ商会はオスマン帝国と貿易を行っていたにもかかわらず、帝国からの昆虫染料輸入は限定されていた。4.

昆虫染料はフィレンツェにおいてそれぞれの種類ごとに異なる価格で販売され、その価格は非常に高いものから安いものまで様々であった。

備忘録の調査により以上の特徴を明らかにした上で、カンピーニ商会の経営に関する F. メリスや S. トニエッティらの研究や、15 世紀ポルトガルに関する金七紀男らの研究を調査し、データの特徴をより広い歴史的コンテクストの中に位置付けた。その結果、以下の結論を得た。カンピーニ商会がとりわけリスボンからの染料輸入を熱心に行ったのは、ポルトガルが 14 世紀末の革命による社会変動ののち新興ブルジョワによる活発な経済活動の舞台となり、多くのイタリア商人をひきつけていたからであった。ポルトガルにはジェノヴァ商人やフィレンツェ商人が訪れ、資金提供や貿易を通じてポルトガルとの経済的関係を強めていた。カンピーニ商会もまたリスボンの代理店を通じて様々な経済活動を行っていたのである。ただトニエッティは、リスボンの代理店が商会に対して徐々に負債を抱え、リスボンからの輸出によってもその負債を軽減できず、この負債が 1482 年におけるカンピーニ商会の破たんを引き起こしたと考える。

このトニエッティの指摘は重要であるが、商会の昆虫染料輸入に限ればリスボンからの輸入は 1470 年代も続いていた。そこで昆虫染料輸入と商会経営との関係を考えるには、前述した 1465 年以降のバルカン半島からのケルメス輸入減少にも着目しなければならない。当初、商会はケルメスをヴェネツィアやラゲーズなどから大量に輸入していた。このケルメスは「小ケルメス chermisi minuto」と呼ばれ、D. カルドンも述べるように原産地であるポーランドの他にバルカン半島でも採取されていた可能性が高い。しかし、おそらくバルカン半島におけるオスマン勢力の進出などにより小ケルメスの流通ルートが一時的に寸断され、商会は小ケルメスを輸入できなくなった。このことはケルメス販売による収益を減少させ、商会の経営にある程度の影響を与えることになったと考えられる。カンピーニ商会はポルトガルとの関係を重視したと考えられてきたが、商会の経営を考える際には、ケルメス輸入を通じた東地中海との関係も検討する必要がある。

他方で、カンピーニ商会がイベリア半島とりわけリスボンからグラナを輸入し続けたという事実もやはり重視すべきである。このことはフィレンツェにおいてイベリア半島産グラナの需要が大きかったことを証明しており、実際にそのいくつかは高値で取引されていた。メリスやトニエッティが指摘する商品としてのイベリア半島産グラナの重要性は、改めて強調されるべきである。

以上のようにカンピーニ商会の備忘録は、地中海世界の東西さらにはポルトガルからも大量に運ばれる昆虫染料の流通について

具体的な情報を与えている。本研究で得た研究成果の詳細を、今後学術誌に論文として掲載していく予定である。

以上が本研究で得た研究成果のまとめである。成果の(1)および(2)は、フィレンツェの会社がオスマン帝国との貿易を予測可能な経費で安全に行っていた事実を明らかにした。すでに星野によりフィレンツェ・オスマン貿易の重要性は指摘されたが、本研究はその重要性をより詳細なデータとともに裏付けた。また(3)は、広範な国際商業活動を行ったカンピーニ商会の備忘録から、これまで詳細に解明されてこなかった昆虫染料輸入の実態に迫った。

ただこれらの研究成果を得たものの、フィレンツェ・オスマン貿易の実態およびそれがフィレンツェ経済に与えたインパクトを解明するためには、今後も史料や先行研究をさらに網羅的に調査していく必要がある。とりわけ、オスマン国内で記録されたフィレンツェ人駐在員の帳簿が数冊伝来しており、これらの調査が最も重要となる。これについては、今後の課題としたい。

参考文献

研究成果の(1)および(2)については、次節で掲げる発表論文・で挙げた文献を参照。

(3)に関する主要な参考文献は、

Cardon D., 'Du «verme cremexe» au «veluto chremesino»: une filière vénitienne du cramoisi au XV^e siècle', in *La seta in Italia dal Medioevo al Seicento. Dal baco al drappo*, a cura di L. Molà, R. C. Mueller, C. Zanier, Venezia, Marsilio, 2000, pp. 63-73.

Cardon D., *Natural Dyes. Sources, Tradition, Technology and Science*, Eng. trans., London, Archetype Publication, 2007.

Edler de Roover F., *L'arte della seta a Firenze nei secoli XIV e XV*, a cura di S. Tognetti, Firenze, Olschki, 1999.

Hoshino H., 'La tintura di grana nel basso Medioevo', in Id., *Industria tessile e commercio internazionale nella Firenze del tardo Medioevo*, a cura di F. Franceschi e S. Tognetti, Firenze, Olschki, 2001, pp. 23-39.

L'Arte della seta in Firenze. Trattato del secolo XV, a cura di G. Gargioli, Firenze, Barbera, 1868.

Melis F., 'Di alcune figure di operatori economici fiorentini attivi nel Portogallo nel XV secolo', in *I mercanti italiani nell'Europa medievale e rinascimentale*, pp. 1-18.

Melis F., 'Malaga nel sistema economico

del XIV e XV secolo', in Id., *I mercanti italiani nell'Europa medievale e rinascimentale*, a cura di L. Frangioni, Firenze, Le Monnier, 1990, pp. 186-190.

Tognetti S., *Il banco Cambini. Affari e mercati di una compagnia mercantile-bancaria nella Firenze del XV secolo*, Firenze, Olschki, 1999.

Tognetti S., *Un'industria di lusso al servizio del grande commercio. Il mercato dei drappi serici e della seta nella Firenze del Quattrocento*, Firenze, Olschki, 2002.

金七紀男「1383-1385年革命とアヴィス王朝の成立 海外進出前夜におけるポルトガルの社会変動」『東京外国語大学論集』第37号, 1987年, 241-262頁.

金七紀男『ポルトガル史 増補新版』彩流社, 2010年.

齊藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館, 2002年.

星野秀利『中世後期フィレンツェ毛織物工業史』齊藤寛海訳, 名古屋大学出版会, 1995年.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

鴨野洋一郎, 15世紀後半におけるフィレンツェ毛織物会社のオスマン貿易 グワンテイ家の経営記録から、史学雑誌、査読有、第122編第2号、2013、42 - 65

鴨野洋一郎, ルネサンス期フィレンツェのペルシア生糸輸入 フィレンツェの経営記録から、西洋史学、査読有、247号、2012、21 - 37

〔学会発表〕(計1件)

鴨野洋一郎, 15世紀フィレンツェの赤色染料輸入 カンピーニ商会の備忘録から、イタリア歴史文化研究会、2014年3月18日、明治大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等